

敗北と生還と・・・By 石井長官

20XX年。とある地方での逢魔ヶ時。

私たちの乗っていた特別車両・ゴーストが襲撃された。特殊機動隊員・計6名のうち、私・・・特殊機動隊第97代長官・石井・・・と、その直属の部下・橋本冬彦。そして、ヒトではないが、妖魔刀の大善。生存者は、これだけだ。あとは、奮闘むなしく天に召された。

仕方なく、まだ息のある橋本を安全な場所に隠し、私は大善を手に、襲撃犯たちと戦った。

多勢に無勢を地で行く戦い。どうしても、私と大善が不利になる。土砂降りの雨の中、少しずつ追い込まれていく・・・

『傷は、痛むか？』

物言う妖魔刀・大善が、緊迫した口調で私に尋ねる。

「最悪だ・・・しかし、ここも戦場ならば仕方あるまい・・・」

『ご自慢の利き腕がやられるとは、すごく不利になるぞ？』

「・・・泣きごとを言う暇はない・・・」

うっそうとした竹林にいつときだけ身を隠し、水妖魔どもの目をくらます。だが・・・いつまで持つやら？

「橋本さえ無事なら、あとはどうにかなる・・・あいつなら、100回、1000回、56しても、くたばるまい・・・」

『だが、我々は・・・』

珍しく、大善の口調は重かった。

「・・・この首を取られれば、敗北だな。」

悲しき苦笑いのあと、つい、唇を噛み締めた。

『自決さえ許されないであろうな。我々には。』

「・・・すまない。私が弱いばかりに・・・」

つい、戦友に謝罪した。

『逆だ。弱いのは、令和新刀の自分だ・・・お前のような優秀な戦士を失うのは・・・』

「よせ・・・もう、我々は生き残れまい・・・感じるか？」

『ああ、かなりの数だ・・・』

大粒の雨が降るにつれて、敵の数が増えてくる。ここが見つかるのは、もはや時間の問題。

『・・・もう、我々は大事なモノに会えぬだろうな。長官の恋人、名前はユマちゃん、だっけ？』

「ああ・・・宇宙で一番愛していた。そして、あの子も・・・」

ふと、瞼に愛くるしい由真の笑顔が、蘇った。

「大善・・・お前も、好きな子が居ただろう？名前は？」

『小風斬・・・守り刀で、平成新刀・・・私と同様に、言葉も発するぞ？』

ズキッ！！

瞬間、負傷した右腕に、鋭い痛みが走った。

「・・・痛み止め、効かないなあ・・・」

うんざりするほどの雨音の中に、つい、弱音を隠した。

日が完全に暮れて、さらに敵の数が増えた。そして奴らは、じりじりと近づいてくる。

「今夜は、くたばるのにちょうど良い。」

・・・ついに私は、自決代わりの特攻を決意した。大善には悪いけど、道連れにするより他はあるまい。

『安心しろ、長官・・・』

「！！！」

『私ごときのスピアなら、未来永劫、いくらでも造れる。唯一無二の闘鬼であるお前とは違う。』

私の思いを察したのか？大善が、慰めの言葉をかけてくれた。

「…こかざぎりど愛し合えなくなるぞ？」

つい、余計なことを言う…

『あの子は、元は妖魔刀・鬼三の妻であった。だから、人間世界で言うバツイチか？ならば、バツが2つ3つ、それ以上についても…チャーミングだから再婚相手に困るまい。』

「のろけ、か？」

つい、笑ってしまった。

『お前こそ…今後はユマちゃんの再婚？片っ端から阻止するつもりだろう？ひどいぞ？』

「ああ…悪霊になって由真に取り憑く…私は、お前ほど優しくない…」

ザーザー…雨は、ますます激しさを増した。

痛み止めを追加して、フラフラと立ち上がった。今ごろ、橋本だけでも味方に救助されていれば、良いのだが…あんなヴァカでも、居なくなれば、我が組織の損失だ。

「さて…」

最期の戦いに備えて、最近由真から買ってもらった赤いネクタイで、大善の柄に、自身の利き手をくくりつけた。

— 石井さま…だ〜いすき、です！！ —

突如、由真の笑顔を思い、一筋の涙が出た。

『…お前まで、のろけか？』

ふふ…今度は大善が笑った。

今…我々の位置が敵にバレている。じっと出てくるのを待つか、さもなくば、先制攻撃をしかけるだろう。ならば…

「ありがとう、大善。楽しかった。」

『こちらこそ…』

不器用な戦闘ヴァカが、これまた不器用な挨拶を交わす…

意を決し、竹林から出てきた我々の前に、十数人？十数匹？…の、敵が待ち伏せしていた。

『行こう、石井長官…』

「ああ、行こう…」

ここで逃げたら、先に黄泉路へ旅立った戦友たちに、申し訳ない。もとより、命は惜しくない。最期のときが、来ただけだ。

すーっ、はあー、すー…

深呼吸の後に、駆け足で躍り出た。

「くたばりたい奴から、かかって来い！！」

言い終わらないうちに、2〜3匹の敵を、叩き斬った。その直後だった。

…E-7号、五時の方向に下がれ！！…

憎らしい、懐かしい、男の声。瞬時に、言われた通り身体が動き・

雷撃っ！！！！

本当に、一瞬だった。

あれだけ居た敵が、全員、曇天から落ちた雷撃によって、ほぼ同時に消滅した。

「…夢なのか？」

ほぼ無傷の敵全員に、ほとんど同じタイミングで落ちた。雷撃の凄まじい衝撃が、彼らの頭から足先まで貫き…勝負が一瞬でカタがつくか？

そんな…ヴァカな？

…よお、元祖色男…

呆然としている我々の前。とてつもなく大きな、白銀の九尾の狐が…全長にして、軽く4～5メートルありそうだ…土砂降りの雨を受け、ゆうゆうと宙を舞っていた。

牙むき出しの口に、鞘から出した妖魔刀？の、柄を咥えていた。その刃は雨に濡れ、一層、神々しい銀色の輝きを増していた。

『お…おにみつ？』

絞り出すような、大善の声。

追加の負傷を免れた私は、戦友を手にしたままその場にへたり込んだ。

この声？…やはりあいつ…なのか？

世界で一番、憎い男・E-15号。

それに…8年前、E-15号が特殊機動隊から奪った、あの江戸時代初期の妖魔刀・鬼三ま
で…

出来すぎた偶然に、ため息すら出てこない。

…命拾いで何よりだ、E-7号…

…ますます良い男になったな…

…さすがお前だ…さすがは俺の…

屈託のないあいつの、少年時代の笑顔を、思い出す。この狐の正体が、あいつなら…この世で最も頭の痛い存在・鮫島 聖ことE-15号。あいつだとしたら？…あいつは、8年前に我々の妖魔滅殺組織から、逃げ出した。

その後の土御門征伐で、私の目の前に、大狐の姿で現れて、すぐに消えた存在だ。

あのとき逃がした大きな白銀の狐が、今、敵対しているはずの私を救うため？一度に十数発の雷撃を落として、水妖魔の一個小部隊を、殲滅させた？…一瞬で？…

あり得ない…いや、そんなことあるはずがない！！あつてたまるか！？

…じゃあ、またな…

瀕死のダメージを負い、膝をつきへたり込む私の前から、大狐は、これまたゆうゆうと曇天に姿を消した…

このプライドに、さらなる深い傷跡を残して。

Eのショートストーリー 了。